
鬼姫怪奇譚 《改稿版》

詩鳴研一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼姫怪奇譚 《改稿版》

【Nコード】

N6576Q

【作者名】

詩鳴研一

【あらすじ】

ふじわられいり 入学当時以来藤原玲璃という女性を避けてきた相馬槻は、友人の頼みで藤原玲璃が部長をやっている学校唯一の非公認部活《怪奇研究部》を訪れることが決定してしまった。藤原玲璃に、友人の恋人が化け物になったと相談するため、部室棟の中を歩く槻の足は、異常なまでに重かった。まるで、ここから先には進むなど、暗示しているように。

「プロローグ」 藤原玲璃

藤原玲璃という名の女性は、僕の通っている学校において、少しばかり特別な地位を確立している。生徒からはご意見番、あるいは相談相手。教師からは一目置かなければならない人、という認識が強まっているらしい。

長い黒髪に高い身長、線の細い手足に体という、ごく一般的な容姿をした藤原先輩が、どうしてそんな立場を確立しているか僕は知らないのだが、少なくとも僕が入学した一年前には、すでに彼女はそんな存在だった。

現在三年生で受験を控えているであろう藤原先輩の特徴を端的に言えば、暗い、の一言に尽きる。

教室では、いつもぼんやりと窓の外を見ているらしいし、昼食は一人で食べている姿が毎日のように目撃されている。放課後は正体不明の部活動【怪奇研究部】の活動に勤しんでいるようだが、部員は彼女だけ。他に誰もいない部で何をしているのか、僕には見当もつかない。

そんな、独りぼっちを体言したような藤原先輩は、信じられないことなのだが、男女共にとっても好意を持たれるらしい。

彼女の発言は確固たる理論または論理、あるいは得体の知れない正しさを感じさせるらしく、相談相手には打ってつけなのだろうか。

また、普段人と関わらない彼女はとてもミステリアスで、その上信頼も置かれているという強み、独りぼっちという弱みを兼ね備えた、男性としてはとても都合の良い相手、なのだそうだ。

そんな彼女には、友達と呼べる相手が一人もいない。

食事を一人で取ることから判断できると思うが、藤原先輩は一人も友達と呼べるに値する関係の人がいないらしいのだ。

誰かと遊んだ、という噂も無ければ、登下校を一緒にする相手がいるはずもない。携帯電話は持たない主義のようで、ということは、

メールアドレスを交換している相手も、当然のようにいないだろう。信頼が置かれ、人気があるという事実以外には、完璧に一人という状況だ。

孤独の理由は間違いなく彼女が暗いことだろうが、それを除いたとしても、藤原先輩は一人を自ら選ぶのではないか、と僕は思う。ずっと昔、僕がまだ一年生だった頃、僕の知り合いが、悪ふざけで藤原先輩に告白したことがある。その時、彼女はたった一言だけ言ったそうだ。

【いいけど、必ず後悔する】

無論、僕の知り合いはその言葉を恐れて手を引いた。そうやって、言葉と態度で壁を作る。誰も近づかせず、誰しもを遠ざける。そうやって他人との距離を取る理由はわからないが、結局彼女は一人が好きなのだ、と僕は推測する。

藤原先輩は、どうしても人と距離を作りたがっているように思える。遠ざかることで、また離れすぎないことで、まるで適度な繋がりを読むように、絶妙な距離で人間関係を維持しているように、見えるのだ。

勿論、見えるからと言って、いやよく見るからと言って、僕は彼女に関わりたい、とは思わない。遠巻きに見ている程度の遠い存在が僕にとっての藤原玲璃だし、彼女にとっては僕が存在など欠片も視界に入っていないだろうから、この距離感がちょうど良いのだ。

そもそも学年の違う相手なのだから、適度もどうもない。

関わらないという選択。

それが最良の答え。

どっちにしる藤原先輩は来年卒業するのだし、僕も再来年には卒業する見込みだ。大学に行き、社会に出れば、藤原玲璃という存在は高校時代人気だった先輩、程度の記憶にしか残らない。

それでいい、と思っていた。

しかし、事態は一転する。

六月六日、火曜日。

ちょうど雨が降っていたその日に、僕は友達である尾田から連絡を受けた。電話越しに、気の弱い友人は震えた声でそばそと言った。とても支離滅裂だったので脚注すると。

- 一、尾田の恋人が化け物になった。
- 二、化け物と化した恋人は逃走した。
- 三、怪奇研究部に依頼をして欲しい。

以上の三つに要点できるだろう。

端的に言えば、恋人が化け物になったからその解決を怪奇研究部に依頼してくれ、ということなのだが、そんなおかしな話が信じられるわけもない。

当然、僕は何かあぶないものにでも手を出したのではないかと友人を心配したのだが、どうやらそうでもないらしい。自分のことはよくわかっていようだったし、心底怯えているような声だった。とても、嘘でそんな声を作っているとは思えないほどに。

あまりにも必死で。

酷く痛々しく。

そんな友人の変わりように、疑い深い僕も信じるしかなかった。結果的に、僕は怪奇研究部を訪れる運びになった。しかし、それは僕にとってそれなりの覚悟が必要だった。

怪奇研究部に依頼をしなければならぬ、ということは当然、藤原先輩と対面しなければならぬ。

僕は怖かった。

藤原先輩自身はそれほど怖い人ではない、と思う。性格も温厚だと聞いているし、彼女自体は普通の人間なのだから、恐れるはずもない。

ただ。

僕には、藤原先輩を見るたびに、見なければならぬものがある。半透明な何か。

そうとしか形容できないもの。

藤原先輩の背後にはいつだって、薄ぼんやりと何かが浮かんでいる。見守るように、あるいは見張るように、現実にいるとは思えない、生きているとは思えない物体が、ふわりふわりと浮いているのだ。

おそらくそれは憑きもの。

一般人には見えないもの。

僕には見えてしまうもの。

それはつまり。

藤原先輩には、実体のない何かが、具体的に言えば霊のようなものが憑いている、ということの意味していた。

《プロローグ》 藤原玲璃（後書き）

以前書いた【鬼姫怪奇譚】改稿版になります。これから全文改稿したのを載せますので、好ご期待ください

〈一〉 霊の見える少年

放課後の校舎は、静寂とも騒乱とも言えない中途半端な活気に満ちていた。部活動に勤しむ人、友達とゲームをする人、あるいは律儀に勉強する人まで含めて、しかし僕はどの分類にも属さないであろうことを実感した。

現在、僕は怪奇研究部の部室前にいる。

西から東まで一直線の四階建て校舎。その中、三階の一番東側にある部屋。部室棟なんてたいそうなものはこの学校にはないので、明確に言えば部室ではなく、ただの使われていない理科室なのだが、この部屋が件の怪奇研究部が活動している場所だ。

本来は非公認の部活動である怪奇研究部に部室はないのだが、どういうわけかちゃんとした部室が用意されている。これも何かしらの裏があるのだろう、と探りを入れつつ、僕は少し躊躇いながら戸を開けた。

理科室の中は、当然ながら広い。水道が三つ連なって取り付けられた流し台付きの机が合計六つ。広さだけを取れば充分だが、物が乱雑に置かれているせいか、とても狭く感じる。

置物は本。

山のような書物。

軽く千はいくだろう。雑誌から漫画本、文庫本からゲームの攻略本まで、かなりの種類がある。

藤原玲璃は本をよく読むのだろうか。

なんてことを考えていると、彼の人物の姿を見つけた。

教室の中央。本に囲まれて、ひっそりと、そう言い表した方が最も適当だと感じさせる儚さで、座っていた。

流し読みするようにページを捲っていたが、その手を止め、不意にこちらを見てくる。

背後に映る白い影に、こちらの視線は向いてしまう。

「あら、こんな場所に来客だなんて、珍しい」

声のトーンは、とても低かった。

男性ほど低くはないが、女性にしては重い。

「何か相談？　なら話を聞くから、そこに座ってちょうだい」

自分の前を指差す藤原先輩に誘導されるまま、僕は椅子に腰掛けた。

「さて、まずは名前を聞きましょうか」

手慣れた手つきで藤原先輩は話を進める。

「相馬槻です」

「そうまけやき？」

藤原先輩は神妙な顔付き。

こんな名前はやはり珍しいのだろう。僕自身も、自分の名前は希だと思う。

「珍しいですかね」

「まあ、滅多にいない名前ね。漢字は簡単なほうでいいのかしら
はい、と僕は頷く。

「それで、今日は相談をしに来たのよね。まあ、聞かないでも、ここに来る人は基本的にそういう理由だから、言わずともわかるのだけど」

「はい。今日は知り合いに相談を頼まれてきました」

「それで、相談って何？　恋愛？　学問？　人間関係？　それとも進路？」

どうやら、藤原先輩は結構な幅の相談を受けているらしい。

それは置いておいて。

僕は切り出した。

「その、信じられないと思う話なんですけど、一応【怪奇研究部】の名前には適している話を持ってきました」

「ふうん、やけにもったいぶるのね。まるで商談みたい。これはあくまで相談なのだから、そんなに力まなくても」

「友達の恋人が化け物になりました」

先輩は発言を止めた。

先ほどまで軽く笑みを見せていたが、途端に真剣な表情になる。馬鹿にしている、わけではなさそうだ。

「へえ、化け物に。具体的に言ってどんな化け物？ 化け物と言われても人型から獣型、あるいは宇宙人みたいなのか、ファンタジー小説を探せばいくらでも出てくるのだけど」

「具体的に言うなら」

少々探りをかけてきている藤原先輩の発言を止め、尾田から聞かされた話を、そのまま伝える。

「顔はそのままですが、左手と両足は女性とは思えないほど筋肉が盛り上がっていて、右手は三本爪の、例えるなら竜の腕みたいになつたらしいです」

「竜の腕…… 龍関連だと九頭竜とか五頭竜とか、腕関連だと猿の手ぐらいなら聞いたことがあるけども、龍の腕だけ、なんてあんまり聞かないわね。せいぜい格闘ゲームのキャラクターが龍のつく技名のアッパーカットを使うぐらいかしら」

ゲームもそこそこやるのだろうか。

いやいや、そんなことは置いておこう。

「実際見ていないのでわからないんですが、大まかに言つとそんな状態になつたらしいです。今回の相談は、その友達、尾田啓介について二年の生徒から頼まりました」

「尾田つてことは、恋人は咲間貴美さんだつたかしら。一時期は人気だつたけど、彼氏作つてから好感度がだだ下がりした、あの」

「言い方悪いですね。まあ、そうです。今回化け物になつたらしい人は、一年の咲間貴美。ここに来る前に調べたら、三日前から学校に来てないようです。小耳に挟んだ噂によると、家にも帰っていないんだとか」

先輩は思い出したように、ああ、と呟いた。

「その話なら、いくつか聞いているわ。彼女も彼女で有名だし、私も私の立場的に相談は受けるし。聞いた限りでは、搜索届けは出さ

れていなくて、家には定期的に連絡が入っているらしいわね。非通知だから、どこからかけているのかわからないらしいけど」

「搜索依頼でも来たんですか？」

「まあね。彼女の友達数人に探して欲しいと言われた。こういう時って、人はずるいわね。私には探せと言うくせに、自分たちでは聞き込みの一つもしないのだから」

愚痴混じりに藤原先輩は溜息をつく。

「それで、槻君としてはどういう相談なのかしら。探せと言われても、私には搜索能力なんてないのだけど」

「探してほしいとは思ってません。ただ、調べて欲しいんです」

「調べる？」

藤原先輩は疑問符を浮かべた。

「調べるって、咲間貴美がなったっていう化け物について、ということ？」

「はい。未だに信じられませんが、咲間貴美が化け物になったのなら、それには理由があるはずなんです。原因がわかれば、元に戻すことも可能だと思うわけです。怪奇研究部なんて部活をやっている先輩なら、情報の当てはあるのではないかと」

「まあ、情報源はないわけではないけど。それにしても槻君」

先輩は実に不思議そうな顔で、僕を見ている。なんだろうか、僕の顔はそんなに疑ってしまうほど悪いのだろうか。

「あなた、どうしてそんなに冷静なの？」

疑問を抱くのは、僕自身も当然だと思った。

「友達の恋人が化け物になりました、なんて話は、普通なら到底信じられない。でもあなたは信じているし、そして驚いてない。何故かしらね。まるで、そういう事態に慣れているみたい」

「まあ、ある程度経験はあります。あんまり口にはしたくないので言いませんが」

「そう、それはさっきから私の後をちらちら見ているのと、関係があるのかしら」

この人、視線まで見てくるのか。

藤原先輩は嘘も見抜けるのではないか、なんて考えながら、僕は結局は告げなければならぬと確信していた事実を言う。

「……はい。実は僕、先輩の後に憑いているものが見えるんです」
先輩は何も言わない。

呆れているのかもしれない。

「信じられないと思いますが、僕は霊が見えるんです。霊視って、知ってますか？」

「あれよね。霊が見えると言われてるけど、実際にはもっと高度なことができるやつ」

「それです。僕は、その霊視持ちなんです。だから藤原先輩の後に憑く何かが、見えるんです。信じてはもらえないでしょうが」

たぶん、僕が藤原先輩の立場だったら信じないだろう。この現代社会で霊視だなんて、馬鹿にされて当然だ。

しかし、藤原先輩は特にあざけることもしないで、自分の後方に目を向けた。

「どのくらい見えるの？」

「え？」

「だから、どの程度見えるのかって訊いているの。うつすらとなのか、リアルになのか」

問われ、僕はとっさに藤原先輩の背後を確認した。

「えっと、薄ぼんやりとです。半透明の霧みたいなのが、先輩の背中に浮いているのが見えます」

藤原先輩は少しばかり力を抜いたように、息を吐いた。どうしたのだろうか、緊張がほどけたようにも見えたけど。

「あの、それがどうかしましたか」

「いいえ、完全に見えていないのなら救いがある、と思っただけよ。本題に入りましょう」

藤原先輩は机から一冊のノートを取り出した、底に殴り書きで【咲間貴美怪物事件】と記した。おそらく、それが今回の事件につけ

られた見出し、なのだろう。

「まあ、基本的なことは訊いたから省略するけど、槻君としてはどうしたいのかしら？」

先ほど訊いた内容をメモしながら、先輩は訊ねてくる。

「どうしたい、というと」

「最終的に咲間貴美を助けたいのか、助けたくないのか、助けるなら自分で助けるのか、他人の力を借りるのか。なんてことよ」

「えっと、僕としては咲間貴美を生きたまま尾田の元に返してあげたいです。化け物になった以上、理性があるかわからない咲間貴美が元に戻るかはわからない。けど、できるなら、その方法を調べてください」

一通り述べると、藤原先輩は会話内容を全て書き出し、ノートを綴じて立ち上がった。

「うん、大体わかった。まだあなたが助けるのか他の誰かが助けるのかは決まっていらないようだけど、それは後々決めましょう。それじゃあ、早く出かけることにしましょうか」

「行ってくて、どこにですか？」

「協力者の所よ」

言って、先輩は歩き出した。

僕も、それに着いていく。これから向かう先を訊いてみると、先輩は端的に言った。

「廃墟よ」

どうやら、協力者はまともではないらしい。

《Ⅱ》 博識と三つのコント

学校を出た僕達は、協力者の住む廃墟に向けて歩き出した。僕が通う高校は駅の近くにあるので、一歩踏み出せば、すぐさま人の波にのまれてしまう。

人混みの中、僕は藤原先輩に付いていった。

先輩は、周囲など一切気にしていないといった様子で、人をかき分け前に進んでいく。道中会話ははない。一時的な協力関係なのだから、会話なんていらない、とも思われているのだろうか。

しばらく歩いて、郊外に來た僕達は、廃れたビルの前で立ち止まった。先輩はその廃墟としか形容できない建物を見上げている。

「さ、いくわよ」

「本当に廃墟なんですね……こんな所にいるって、どんな人なんだろう」

「ま、変わった奴よ。端的に言えば変質者」

変質者の知り合いがいる女子高生、というのも希だな、なんて思う。

黄色のテープと緑色のフェンスをかいぐり、僕たちはビルの中に入った。

内部はとてもほこりっぽく、そして汚臭がした。動物の糞の臭いのようだ。おそらく、鼠か猫でも住み着いているのだろう。

今にも崩れ落ちそうな階段を上り、僕らは三階まで上がった。階段から直接繋がっている、扉もない部屋の中に入る。

そこは、奇妙な空間だった。乱雑に置かれた金庫が、合計十七個。大きさはさまざまで、一番大きいものは人ほどもある。

「白、用があつてきたわ。出てきなさい」

ちようど部屋の中央に置かれている最も大きい金庫から、不意に手が伸びた。

金庫の裏に人がいるようだ。

「んー、玲璃が訊ねてくるなんて珍しいね」
中性的な声が聞こえてくる。

金庫から上に伸ばされた腕が引つ込むと、代わりに立ち上がった人物の後ろ姿が、僕の視界に入った。

長身で細身。白いインクをそのまま付けたような、真つ白な髪が特徴的な、骨格的に言えば男性であろうその人は、振り向いた。

カラーコンタクトでも入れているのか、青い両目がこちらを見る。

「あれ、その子は誰かな。玲璃の彼氏？」

「違う。事件を持ち込んできた依頼人」

「ああ、なるほど。また厄介事に巻き込まれちゃったわけね」

そんな、世間話のような会話。

ただ、件の男は、藤原先輩の顔なんて見ていない。ずっと、僕のことばかりを凝視している。

「ふむ、なるほどなるほど」

言いながら、男は歩き出した。

長い足を動かし、十数歩で僕の前まで来た。

にんまりと、不気味な笑顔を見せる。

「ぼくは轟木泊。君の名前は？」

「え、えっと、相馬槻です」

「槻君か。変わった名前だね。ふむふむ、なるほど。その目を持った君が依頼主、ということとは、霊関連のなにかかな？」

ふむふむ、と自分の口で言う人を初めて見た。

いや、そんなことよりも。

轟木と名乗ったこの男は、僕の目について、見抜いているようだ。藤原先輩とはまた別の、何かを察知する術を、持っているのかもしれない。

「それは見当違いだから。今回の依頼は、槻君の友達の彼女が、化け物になったってことらしい。それについて調べたいんだけど、なにか知恵はないかしら」

すかさず割って入ってきた藤原先輩に、轟木はおどけたような面

持ち。

「化け物、ねえ。よくわからないけど、どんな化け物？ 化け物たっているいろんな国のさまざまな化け物があるわけだし、それだけじゃ情報もなにもないよね」

「槻君の友達によれば、変化の主な部位は腕。形状は龍の腕だそうよ」

「龍の腕？ うーん、龍の腕の話は、あんまり聞かないなあ。虎になった、なんて話は教科書にも載っているけど、龍になるってのは、そんなに詳しくない。せいぜい鯉の滝登りぐらいだね」

思案顔で、顎に手を当て、しばらく轟木は考えにふけていた。部屋の中を歩き回り、時折金庫を開けて、中から紙束を取り出したらしながら、やがて、金庫の上に座る。

「あ、そうだ」

ようやく答えが見つかったのか、轟木は話し始めた。

「あくまで聞いた話だから確信はないし、想像の部分も大きいからなんとも言えないんだけど、似たようなのはあるよ。そっちは熊の手だったらしいけど、似たような事例が」

「聞かせてちょうだい」

先輩が訊ねると、轟木は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「えー、どーしよっかな。ただ教えるだけっていうのも、つまらないし」

まるで子供の様にあどけない とは言い難い様子で話す轟木に、先輩は呆れた面持ちで、事前に用意していたように言葉を繋げた。
「どうせまた【ヒント】とか言い出すのでしょうか？ もったいぶらずにさっさとヒントでもなんでもいいから出しなさい。純粋な答えなんて、あなたに期待してないから」

「冷たいなあ。ま、その通りだけど」

どうやら、このようなやりとりは今回が初めてではないらしい。ヒント、といったか。わざわざ答えを言わない意味はわからない

僕としても急いでいるのだし、早く答えにたどり着きたいが、

何かしらの意味はあるのだろう。

僕は黙って、そのヒントを聞いた。

「ヒントは三つ。【明治三五年の脱獄囚】、【癌と突然変異】、【韓国の映画】だ。この三つを詳しく探れば、答えが出るはずだよ」
三つのヒントが出されたが、僕は意味すらわからなかった。

明治三五年の脱獄囚。

これは、僕の生まれるずっと前の話だし、それだけで特定できる可能性も低い。

癌と突然変異。

どういつ繋がりがあるのか、僕にはわからない。癌はともかく、突然変異という言葉にはどういつ意味があるのだろうか。

そして一番わからない、韓国の映画。

そんな無数にありそうなものを、どうやって判断しろというのか。僕が困惑していると、藤原先輩は深く溜息を吐き、歩き出した。

「よくわからないけど、とりあえず探してみるわ。それじゃあ、あなたにはもう用ないから」

「つれないねえ」

当たり前のように去っていく先輩に、僕も慌てて付いていこうとするが。

「そうだ、槻君」

呼び止められた。

僕が振り向くと、金庫に座っている白は、おもむろに笑う。

「玲璃をよろしくね。あんなものを背負っちゃっている人だけど、基本は気の利く奴だからさ。ま、よく見なければわからないと思うけど。それじゃあ、またいつか」

そう、別れを告げてきた。

僕は少しばかり怪訝に思いながらも、取り残されるのも嫌だったので、急いで先輩の後を追いかけた。

外に出ると、藤原先輩が待っていた。

「遅かったわね」

「呼び止められてました。待たせてすいません」

「別にいい。さて、これから調べ始めるわよ。まずはヒントの【明治三五年の化け物】について調べようかしら」

疑問に思い、僕は訊ねる。

「調べるったって、どこで調べるんです？ ネットとか図書館とかが無難ですけど」

「調べる場所は決めてるわ」

そういつて、先輩は歩き出した。

慌てて追いかける。

「決めてるって、どこですか？」

「私の家よ」

何故に、先輩の家なのだろうか。

疑問に思ったが、何かしらの理由はあるのだろうと考え、僕は黙って付いてくことにした。

《三》 明治三五年の化け物

「私の家にはね、大きな倉庫があるの」

夜道を歩きながら、先輩は話し始めた。

「倉、という表現が正しいかしら。そこには大量の書物があつて、いろんな情報とか、怪奇譚とか、そういうオカルトな話が多く残されている。何かの事情で表に出なかった事件や、もみ消された裏話なんかを、私のご先祖さまが、時間をかけて集めたんだって」

「へえ、ということは、明治三五年の化け物についても、わかるかもしれないってことですか？」

「まあね」

どうやら、藤原先輩の家系は、古くからそういった話に縁やゆかりがあるらしい。

先輩が怪奇研究部なんて部活を立ち上げたのには、そこらへんの関わりがあるのだろうか。なんてことを考えている間に、僕達は一件の家にたどり着いた。

「ここが私の家よ」

古い日本家屋だった。

今としては珍しい、瓦屋根が付いた木造の建築物。広い庭が家の周りを囲い、手入れも行き届いているようだった。

古風だ。そんな感想を抱きながら、僕は敷地内に入った。

藤原先輩は家には入らず、庭を進んでいった。僕も後に続くと、やがて離れのような建物が目に入った。

木製の建造物は倉庫のようだ。

藤原先輩はカバンから鍵を取り出し、倉庫の戸についていた錠を開ける。

「槻君、扉開くの手伝って」

「あ、はい」

言われ、僕は木製の扉に手をかけた。

引き戸となつてゐる、やけに重量感のある扉を開けると、中からほこりが溢れた。

少しむせながら、中を見る。

本を置くような棚が、内部を占領していた。それぞれの棚には、資料の山が詰め込まれている。

全て調べていたら一日では調べきれないようなその資料の面を見て、僕は思わず溜息を吐いた。

「あの、これ全部調べるんですか？」

「そうね、内容や配置なんて覚えていないから、調べるとしたら、全部調べるしかない」

「調べ尽くすのにどれぐらいかかりますか？」

「うーん、一週間ぐらい？」

当然のように、藤原先輩は言う。

一週間調べ続ける気ではないだろうな。なんて考えつつ、僕はとりあえず倉庫の中に入った。

「それじゃあ、槻君。手当たり次第に調べましょうか」

「やっぱり、やらないといけないんですね。調べものは苦手なんです」

「依頼主も協力させるのが、怪奇研究部のモットーよ。さつさと始めましょう。時間が惜しいし」

藤原先輩の宣言と共に、長時間にわたる調べものが始まった。

調べている中、僕は疲れた精神を解きほぐすため、藤原先輩に話しかけることにした。

「藤原先輩、一つ聞いていいですか」

「何かしら」

「先輩って、学校では特別な扱い受けてますよね。あれって、なんでですか？」

先輩は呆れたように眉を寄せる。

「別に、意味はないわよ。ただ、怪奇研究部を作って怪談を募集したら、やけに相談事ばかり増えてしまった、というだけのこと。まさか、校長先生まで相談に来るとは思わなかったけど」

どうも、藤原先輩は、無自覚で相談事を引き受けることが多いらしい。

怪談話の一つでも集まるかと思ったら、最初は靈に取り憑かれたかもしれないから始まり、恋愛話、人間関係のもつれ、進路の話題などなど、さまざまな問題を相談されるようになったと、話してくれた。

「私としては、別に私なんかを頼りにしてくれなくていいのよ。問題事なんてものは自分で解決するもの。時には人の力を借りてもいいけど、基本的には自分で解決しないと、意味がない。私は、問題ってというのは試練だと思っているの」

「試練ですか」

「そう、神様が与えた、というわけじゃないけど、それを一人で乗り越えれば、ちゃんと成長できるように仕組みられている。そういう成長を促すためのシステムが、人の問題事だと、思っているわけ」
話ながらも、先輩の手は止まらず、目も資料に向けられ、こちらを向いたりはしない。

「なら、僕の問題も、僕が解決すべきだったんですかね」

「今回の事件はあなたの問題ではないからね。尾田って子が解決すべきだった問題を君が引き受けて、私に流れてきたってだけのことよ。ま、どっちにしろ、私は誰が主軸だって、興味があればそれでいいのだけど」

私は身勝手だから、と先輩は言った。

「はつきり言えば、私は興味がある事柄ならなんだって引き受ける。今回の事件みたいに、完全な怪奇現象つても珍しいしね。正直、関わってよかったと思っている」

「引き受けて正解だったってことですか？」

「そうね。化け物と関わるなんて本当は嫌だけど、でも、どこかで

そついうのと関わつても良いかなつて思っているのよ。誰だつてあるでしょう？ 普通がいいと思ひながら、どこか非現実を望んでいる節が。私は元々普通とは違つけど、でも、そこら辺の感性は、普通の人と同じ」

元々普通ではない、というのは、先輩に憑いているものことだろうか。

そついえば、先輩は自分に何かが憑いていると言われても、驚かなかった。それはつまり、自分に何が憑いているのかを、わかっている、ということなのだろうか。

氣になつて訊いてみる。

「先輩は、自分に憑いている何かについて、どれだけ知っているんですか？」

先輩は少し嫌そつな顔をする。

「具體的には知らないし、教えたくもない。ただ、今の段階で言えるのは、私に憑いているのはただの靈じゃないつてこと。それに【さつき】つて名前があることぐらい。そうね、もっとぶつそつなものが憑いている、とだけ言つておこうかしら」

まるでからかうように、先輩はうつすらと笑みを浮かべた。

何となく察する。

彼女にとつて、自分に憑いているものについて話すのは、禁句なのだろう。先ほど訊いたときも露骨に嫌がつていたし、何かしら訊かれたくない理由があるはずだ。

話題を切り替えるための言葉を出す。

「まあ、いつか話せるときがきたら話してください。それにしても、先輩つて――」

「前から氣になつていただけ」

二の句を継ごうとしたとき、藤原先輩が割り込んできた。

「先輩つて呼び方、なんかくすぐったいわ。玲璃でいいわ。そのほうが氣軽だし」

「え、あ、はい。でも、先輩のほうが呼びやすいので」

「そう。ようやく私のことを名前で呼んでくれる学校の知り合いができると思ったのに」

「どういう意味ですか？」

「別に。あなた以外に、私のことを名前で呼べる人間がいなかった、というだけのことよ。知っているでしょう。私、友達いないのよ」

「まあ、そうらしいですね。何か理由があって友達を作らないんですか？」

先輩は孤独を苦ともせず言う。

「理由なんてないわよ。周りは私をいい相談役とか、上の人みたいに見えていて、対等な関係が作れないだけ。だって、上下のある友達関係なんて、歪んでいるじゃない。友達ってのは対等であるべきよ。上か下かが決まった間柄は、主従の関係でしょう」

確かに、わかる気もするが。

そんな感覚で一人になっでいられるほど、僕は強くない。だから、友達ともどこかで上下ができている。尾田なんかとはずいぶん親しいほうだが、それでも対等、と言えるかどうかはわからない。

「でもね、あなたは少し違うように思うの」

どうしてだか、先輩はしんみりと話し出した。

「どうしてかしらね。敬語まで使われてて先輩なんて呼ばれているのに、どうしてだか対等に感じてしまう。これはあれね」

藤原先輩は、まるで悪意なんて感じさせないような口調で。

「これも、あなたと私が同類、同じ異端を背負った人間だから、かしら」

躊躇わず、僕も巻き込んで、自分を異常者扱いした。

会話が途切れて何時間が経っただろうか。

黙々と調べものをしてっていると、ずっと気まずそうに黙っていた先輩が、唐突に僕の肩を叩いた。

「槻君、これ見てちょうだい」

疑問に思いつつ見ると、それは手記だった。漢文のように漢字だらけの、教科書で見たような古い文体。僕には、なんて書いてあるのかはわからなかったが、一番上に記された【明治三五年八月十六日】の日付だけは、よくわかった。

「先輩、これって」

「明治三五年の手記よ。内容を読んでみたら、とんでもないことが書かれていたわ」

先輩は、そういつて手記の内容を話し始めた。

手記には、要約すると、明治三五年の八月初旬に現れた化け物について、書かれていた。

明治三十五年八月二日、太日川　今の江戸川だ　のほとりに、奇妙な姿をした動物が死んでいた。この動物は基本的に人間だったが、手が熊のように毛深く太く、鼻も熊のそれという、珍妙な姿をしていたという。

発見者は気味悪がり、すぐさまそのことを誰にも告げず、遺体を火葬したのだそうだ。

手記を書いた藤原先輩の先祖は、村人伝に化け物を見たという話を聞き、焼却処分した人物を特定し、話を聞いたのだそうだ。

燃やされた遺体からは、結果的に人間の骨が残った。ことを広めるのは避けたほうが良いと判断され、その事件は闇に葬られ、表に出ることはなかった、のだそうだ。

「これってつまり、過去に化け物になった人がいたってことですか？」

「そのようね。にわかには信じがたい話ではあるけど。どっちにしろ、白がこの情報を元にヒントを出してきた可能性は高い。彼、一度この倉にも来ているしね。ということは、今回の事件と何かしらの関係はあるんじゃないかしら。最後にこう書かれているわ」

藤原先輩は文末を指差して。

「この化け物は、突然変異した人間ではないだろうか」

僕は疑問を隠せない。

「突然変異って……DNAの配列が変わっちゃうあれですか？でも、外見が変わる、なんて話は聞いたことはありませんよ」

「足が六本の山羊とか、頭が二つの亀の話は知っているけど、それらは生まれた時、すでにそんな状態だったらいいし、いきなり変異するというのも奇妙な話よね。まあ、私も突然変異に詳しい訳じゃないから、わからないけど。どっちにしろ、調べないといけない」何かを決心したのか、先輩は立ち上がった。

「ま、それよりも早く、とりあえず休むことにしましょう」

「そうですね、調べものも終わりましたし、僕も一旦家に帰ります」
「？何を言っているの？」

先輩は、本当にわからないといった口調で、疑問を投げかけてきた。

「現在朝の六時。今から家に帰っていたら、学校に遅刻するでしょう。どうせ寝れないのだし、少しうちで休んでいきなさい」

「え、でも、いいんですか？」

「仕方ないじゃない。今のあなた、私から見るとすごい不安定よ。今にも倒れそうぐらい」

言われてみれば、先ほどから体がふらつく気がする。このまま家に帰っている道中、交通事故にでもあつたら、目も当てられない。

「わかりました。少しだけお邪魔します」

「お邪魔されます。で、そこで問題が出てくるのだけど」

「なんですか？」

先輩は少し恥ずかしそうに、それでいて冷静な口調で話し始める。
「私は家に男の子を呼んだことがないの。だから、たぶん家族は勘違いする。朝帰りだしね、最悪お父さんかおじいちゃん辺りに殴られると思うのだけど、覚悟してもらえるかしら」

なんだか、先輩の家には入りたくなくなる事情を聞かされてしまった気がする。

それでも、このまま家に戻るわけにもいかない事実があつたので、僕は先輩の家で休むことにした。

〈四〉 癌と突然変異

藤原先輩のご家族に誤解をされ、結果的に襟首を掴まれたり、娘はやらんと罵られたり、最後には何故か打ち解けて一緒に食事を取ったりした後、僕と先輩は藤原家を後にした。

登校中、同じ学校の生徒から奇異の視線を向けられていたのは、おそらく隣に藤原先輩が歩いているからだろう。誰とも深く関わらないはずの彼女が、男を連れているのだから、自然と注目を集めてしまう。

視線をやり過ごし、その間藤原先輩と話すわけにもいかず、僕は学校内に入った。

下駄箱で分かれる際、先輩は小言で話した。

「放課後、コンピュータールームで待ってる」

それだけ言い残し、先輩は僕を置き去りにして、自分の教室に向かっていった。

僕も気にせず、二年C組の教室に向かう。

教室は二階にある。東西に二つある階段の内、東側の階段を上げて、すぐ隣だ。

西の階段を上った先輩とは離れ、躊躇わず東階段を上った僕は、教室に入った。

微妙な空気と共に、たくさんの視線を受ける。気まずい。僕はできるだけ気にしないようにしながら、自分の席に座った。

一人のクラスメイト たまに話しかけてくる椎名さん、という女子だ に話しかけられた。

「ねえねえ、相馬君。藤原先輩と登校してたけど、なんかあったの？」

嬉々として話してくる椎名さんを、僕はうざったく思ったが、返答しないと後が面倒だ、とりあえず言い訳をしておこう。

「別に何も無いよ。たまたま登校中に一緒になっただけ」

「えー、でもでも、槻君が藤原先輩の家から出てきたの見たって人がいるんだよ？」

一番危険な部分を見られたらしい。

僕は溜息を吐き、とりあえず誤魔化すための言葉を考える。

「実は僕、悩んでいることがあってさ」

「悩んでいること？」

「尾田って知っているよね。あいつ、ずっと休んでいるじゃない。でさ、ちよっと心配になって、どうしていいか、先輩に聞きにいったんだ」

内心で尾田に謝りつつ、別に嘘は言っていないと自分に言い訳をする。

「へえ、確かに尾田君来てないよね。貴美ちゃん獲得してから調子に乗ってたけど、ふられでもしたのかな」

「よくわからないけど、藤原先輩には『一度会いに行ってみればいい』って言われた。だから今度、尾田の家に行ってみることにしたんだ」

「ふうん。ま、私は別にいいけど。そういえばさ」

椎名さんは話を続けようとしてくる。聞きたい話題が終わったなら離れればいいのに。

「その尾田くんの彼女、まあ今はどうかしらないけど、貴美ちゃんさ、学校来てないんだってね」

「そうみたいだね」

自分でも棒読みだつてわかるぐらいの返事をする。

「なんかさ、毎日連絡来てたのに、昨日は来てなかったんだって。もしかしたらやばいんじゃないのって、噂になっているよ」

「へえ、そうなんだ。これはなんか事件があるのかもね」

「たぶん家出だと思うけど。家族にも『しばらく傷心旅行に行ってくる』って伝えてたらしいし。これは本格的に別れちゃったのかもね。ま、不釣り合いなカップルだとは思ってたけど」

尾田、どうやら君の評価は低いらしいよ。

なんてことを内心で呟きつつ、僕は椎名さんとの会話を続けた。
どうして彼女がこうも僕と話したがるかはわからなかったが、話は面白かったので、別にいいやと思うことにする。

クラスメイト 特に男子 の視線が冷たく僕に突き刺さっていたが、それは藤原先輩との一件があるからだろつと、思うことにした。

放課後、二階にあるコンピュータールームに行くと、普段は閉まっているはずの鍵が開いていた。

中に藤原先輩がいるのだろう。僕は躊躇わず扉を開けると、椅子の背もたれに寄りかかり、ぐったりとしている藤原先輩がいた。

「……なにしてるんですか？」

「パソコンを弄っていたのよ」

端的にそう言っ、先輩は気だるそうなまま、こちらを向いた。

「でも、どうやっても検索欄にたどり着かないの。何度か真っ青な画面になって、どうにかして復旧させたのだけど、これ以上操作すると壊れる気がして」

「……先輩、機械苦手なんですか？」

藤原先輩は黙って頷く。

「……そうですか。わかりました。僕がやりますんでいてください」

「それは、私がこれ以上操作すると壊れるからどきやがれ、ということ？」

「その通りです」

厳しく言っ、先輩は唇を尖らせつつ席を譲った。何度もブルースクリーンになっているパソコンを弄るのは僕も怖かったが、手順さえ間違えなければ大丈夫だろう、と気持ちを落ち着かせる。

まあ、ブラウザを開くだけなのだから、難しいことは何一つないわけなんだけど。

「あれ、今何をしたの。なぜそんな簡単に検索サイトが出てくるのかしら」

素でそんなことを言っている藤原先輩は、どこか天然ぼけの属性を持ち合わせているんじゃないだろうか。なんて思いながら、僕は先輩に訊ねる。

「検索ワードは何にしますか？」

「えっと、癌と突然変異でお願い」

「わかりました」

言われた通りに入力し、検索をクリックする。十万件以上の検索結果の内、上から二番目に出た、おそらくもつとも有名であろう情報サイトを開いた。

「読みますね」

「お願い」

「ほぼ全ての癌は、遺伝子の突然変異によって発生する」

僕は読み始めた。

「体を構成している数十兆の細胞は、分裂と増殖を繰り返している。正常な状態では、細胞の政党党分裂は制御されているが、特定の細胞 P 五三などに突然変異が生じると、このプロセスの秩序を乱して、過剰な細胞が発生し、組織を形成する。それが主腫瘍、あるいは新生物と呼ばれる。この腫瘍とか新生物というのが、癌のようです」

残りの資料に目を通しつつ、僕は短く纏めて先輩に伝えた。

「後は、僕らが知っている知識です。良性とか悪性とか。後は、突然変異が積み重なった結果として癌が発生する、とも書いてあります。……でも、これが事件となんの関係があるんでしょうかね」

「わからない。でも、ここでヒントと二が繋がった。問題は、ヒント二の癌という部分。これはきつと そうね、確かめないといけないことがあるわ。さ、行くわよ」

そういつて、先輩はパソコンの電源ボタンを押した。僕が強制終了しちゃだめですよ、と言う前に電源を落としきった先輩は、歩き

始める。

「行くってどこにですか」

「尾田って子の家によ」

尾田の家。

と言うことは、尾田と話すことがあるということか。

しかし、尾田は今、かなり憔悴し切っているはずだ。そんな状態の尾田と、話すことができるのだろうか。

不安になりながら、僕はあくまで案内役として、先輩の後を追った。

〈五〉 尾田という普通人

「尾田って子は、どんな人なのかしら」

「本当に、普通を形容したような奴ですよ」

話しながら、僕は尾田家に向けて歩いていった。距離は徒歩で三〇分程度。話して歩けばすぐだろう。

「普通に中学卒業して、普通に近くの高校に入って、成績も中の下、友達付き合いも並つていう、本当に普通の人です」

「でも、何故か咲間貴美という可愛い彼女がいた、と」

「なんでも、何度も告白したらしいですよ。全部断られて、それでも諦めなくつて、最後は相手が折れたらしいです。まあ、具体的に何があったのかは知りませんが」

会話しつつ、尾田という少年と、その彼女、咲間貴美について思いついていった。

「そういえば、尾田君の下の名前って？」

「啓介です。あいつとは高校から知り合ったんですが、良い奴ですよ。気の利いて、なんかどこかで覚悟していたところがあつて」

「覚悟、ね。もしかしたら、咲間貴美が化け物になるのも、覚悟していたのかもね」

「どういうことですか？」

「それは本人に確認してみればわかると思うわ。さ、もうすぐ着くでしょう？」

「あ、はい」

しばらく歩き、やがて尾田家が見えてきた。

僕は、思わず歩くのを止めた。

「どうしたの？」

先輩が訊ねて来るが、僕は答えず、ずっと一点を見つめていた。

尾田の家。

白い壁の建物。

何度か足を踏み入れたことのある家の二階の窓が、なぜか段ボールで覆われていたのだ。

応急処置、としか言えないそれを見て、僕は緊張した。

視線の先を追った様子の先輩も、表情を強張らせる。

「……槻君、いくわよ」

「……はい」

再び、歩き出す。

尾田家のチャイムを鳴らすと、尾田の母親が出てきた。事情を話すと、尾田は今部屋に閉じ籠もってる、と話してくれた。

何とかして会えないかと頼み込み、何度か断られたが、尾田の恋人の話をする、尾田の母親は複雑な面持ちで、道を開けてくれた。家の中に入り、階段を上る。

二階にある尾田の部屋の扉をノックし、返答がないことを確認してから、僕は扉を開けた。部屋の中は乱雑だった。壁には穴が空き、箆笥は倒れている。案の定、窓ガラスは割れていた。

尾田は、ベッドの上で毛布にくるまっていた。まるで怯えるように、体を震わせている。

「尾田、話があつて来た」

僕の声に体をびくつかせて反応した尾田は、毛布から顔を出す。やつれきった顔。

腫れぼったい目元。

「なんだ、槻か」

擦れた声で、そう言った。

「見てくれよ、この部屋。全部、俺の彼女が壊してっただんだけ」

呆然と言う尾田は、どこかおかしかった。

恋人が化け物になったのだから当然か。内心で呟きつつ、僕は尾田に近づく。

「藤原先輩を連れてきた。お前に、話があるそうだ」

「話……？ 貴美についてか」

僕が頷くと、扉の前で待機してた藤原先輩も近づいてきた。

「初めまして尾田君。私の名前は知っているわね。今日はあなたに、訊ねたいことがあつてきたの」

尾田は、疲れ切った顔で先輩を見ていた。理解できていないという顔で、頷く。

「率直に訊くわ。あなたの恋人、咲間貴美さんは、何か病気を抱えていた？ たえば、癌とか」

真剣な面持ちで訊く先輩に、尾田は見抜かれたように、顔を強張らせた。

うつたえるように下を向き、しばらく俯いていた尾田は、やがて顔を上げる。

「はい……貴美は、確かに癌でした」

「……なるほど。ごめんなさい。あなたとしてはずっと黙っておきたかったことなのに。教えてくれて、ありがとう」

先輩は、それだけ言つて、歩き出した。

「槻君、後のケアをお願い。私、こういうの苦手なの」

そういつて、先輩は部屋を出て行った。

残された僕は、何を話していいかもわからず、立ち尽くす。

僕が黙っていると、尾田がおもむろに話し始めた。

「槻、俺さ、覚悟はしてたんだ」

まるで、恋人が化け物になると知っていたような口振り。

「貴美が、自分は癌だからもうすぐ死ぬとか、化け物になることがあるつて話したとき、正直信じられなかったけど、それでも俺は信じることにして、覚悟したんだ。俺はあいつが好きだから、死ぬまで一緒にいてやる。化け物になるんだつたら、それでも側にいてやるつてさ。でも、無理だったよ」

自重するように話す。

「きつと、あいつが本物の化け物になるなんて、信じていなかったんだ。だから、あいつが化け物になった時、俺は言つちまったんだよ、化け物つて。それで、あいつは暴れまわつて、どっか行つちまった」

自分がした行いを悔いるように、尾田はぼそぼそと、独り言のよう
に呟いていた。僕は、それをただ、聞くことしかできなかった。

「なあ、槻、俺はどうすればいいかな」

問われ、僕は答える。

冷酷に、冷徹に。

それでいて、友達を一番に考えて。

「君は、咲間貴美を受け入れるって決めたんだ。だったらその信念
を貫け。たとえ相手がどんなに醜くなくても、君が彼女を好きにな
って、決意したことに、変わりはないはずだ」

尾田は答えなかった。

僕もたいした助言はできなかったと思いつつ、尾田の部屋を出た。
傷心の友人を残していくのは気が重かったが、僕には僕の、やらな
きゃならないことがある。

〈六〉 化け物の隠れ家

尾田の家から出た僕たちは、そのまま歩き始めた。どこに向かっているかはわからない。先輩は目的地を把握しているようだが、僕には教えてくれないみたいだ。道中、尾田から話されたことを先輩にも話したのだが、アクションはなかった。

「先輩、次に調べるのはヒント三つ目【韓国の映画】についてですね。僕、このヒントについてはよくわからないんですよ。韓国の映画っていったって、山ほどあるから」

「それについては、推測が立っている」

「どうやら、先輩はすでに三つ目のヒントも看破しているらしい。ここまで一緒にヒントを探ってきた身としては、少し寂しくなる。」

「槻君、【グエムル 漢江の怪物】って映画、知ってる？」

「聞いたことはありますよ。巨大な怪獣が現れて、それにさらわれた娘を助けに、家族が奮闘するってお話ですよね」

「そうね。そのグエムルっていう怪物は、廃棄されたホルムアルデヒドによって突然変異し、発生した生物としているの」

「そんな話だったんですか。でも、それが今回の事件となんの関係があるんですか？」

率直に訊ねると、先輩は少し呆れた様子で答えた。

「いい？ 三つのヒントを繋げると、あることがわかる。明治三五年の化け物は突然変異によって怪物になった可能性が高い。突然変異は癌と密接に関わっている。そして、咲間貴美は癌だった。さらに、突然変異によって化け物が生まれるという例を、おそらくちゃんとした計算も入れて映画化が成された。その点を繋げると、どうなると思う？」

「えっと、咲間貴美は癌だったから、つまり突然変異を起こしていた、ということになって 明治三五年の化け物も突然変異を起こしていた、それに映画の話がちゃんとした計算のもと作られている、

ということは　もしかして」

「そう、今あなたが考えているのが、おそらく正解よ」

僕は、さすがに言わずにはいらなかった。

「それってつまり、咲間貴美は突然変異によって化け物になったってことですか？」

「おそらくね」

信じられない。

グエムルのように映画だったのなら、面白いと思うかも知れないが、それが現実的に起こるなんてありえない。

「で、でも。もしそうだとしたら、突然変異の原因はなんなんですか？」

「遺伝によってなっていたのかもしれないわね。あなたがさっき教えてくれた、尾田君の話を元に考えれば、咲間貴美はずいぶん前から、自分が化け物だと知っていた。それはつまり、遺伝的に化け物になる可能性があり、以前にも変異を起こしていたことを示す。咲間貴美は、そういった事情を抱えていて、それを受け入れてくれたから、尾田君と付き合いだしたのかもね。まあ、これは予想だけど」
無茶苦茶だ。

仮に咲間貴美がそういった体質を持っていたとして、なぜ今まで表に出なかったのだろうか。一六年も生きていれば、一度ぐらい誰かに見つかったもおかしくはないのに。

いや、もしかしたら。

咲間貴美の化け物化は、多少なりとも操作できるのではないか。

例えば、咲間貴美が変異したいという意志を示せば変異する、というように、多少なりともコントロールがきくのではないか。

もしそうだとしたら、咲間貴美は尾田の前でわざと変異した、ということになる。

それは、試しだったのではないか。

本当に受け入れてくれるかどうかの。

「でも、そんなことって」

自分の予想を内心で否定しつつ、呟いていた。いくらなんでも非現実的すぎる。僕がいままで関わってきた非現実とは、レベルが違いすぎる。

「おかしくはないでしょう。少なくとも明治三五年の例があるのだし、また同じような事例が起きてもおかしくはない」

「……もしそうだとして」

諦めを混ぜつつ、僕は訊いた。

「咲間貴美は、どこにいるんです？　まさか本当に傷心旅行に行つたんですか？」

「そんなわけないでしょう。化け物になって、その後逃げ出した人が、いきなり旅行になんて行くわけがない。家に帰っていないと言ふことは、隠れているのよ。とりあえず、尾田君にだけは、絶対見つかからない場所に」

「どこに、ですか？　その予想もついているんでしょう？」

「三つ目のヒント」

先輩は短く言って体言止めた。

「あれには、咲間貴美の隠れ家のヒントも含まれているんじゃないかしら。映画のグエムルが逃げ込んだ場所、つまり」

「下水道、ですか。でも、日本の下水道はそんなに大きくないですよ。場所によつては大丈夫でしょうが、こちら辺の下水に人が隠れるなんて無理です」

「でもね、それに似たものがあるのよ。槻君、子の近くの山に防空壕があるの、知ってる？」

近くの山、といえば、学校から二百メートルほどのところにある小さな山のことだろう。名前は覚えていないが、たしかそれなりに昔からある山だったはずだ。

「防空壕？　そんなものあつたんですか？」

「正しくは単なる洞窟なんだけどね。小さい頃、子供たちの間で防空壕と呼ばれていたの。たしか、中はそれなりに入り組んでいて、人が立って歩ける程度の高さと幅はある。ほら、隠れるには

ちょうど良い場所じゃない」

「つまり、今はそこに向かっているんですか？」

「ま、そういうことね」

どうやら、僕らは咲間貴美の元に向かっているらしい。

先輩の予想が全て正しかったとして。

そして僕の想像も全部合っていたとして。

僕らは、咲間貴美に会って、どうするのだろうか。会話して、尾田の元に引き戻すのだろうか。そう、うまくいくのだろうか。

そんなことを考えながら歩き、やがて山の麓までたどりついた。

山の中を進み、やがて洞窟の入り口を見つけた。立ち入り禁止の看板が立っている。どうやら、ここが例の防空壕の入り口らしい。

「さ、入るわよ」

「は、はい」

緊張して中に入る。

内部は、黴とほこりが混じったような臭いだった。足音が反響し、とても暗く、僕が取り出したライトがなければ、前も見えないという状況だ。

頭の上を何匹もの蝙蝠が通り過ぎながら、僕らは歩いた。自然と緊張感が高まっていくのを、僕は感じていた。

「なんか、緊張しますね。すぐ近くに化け物がいると思うと」

「まあ、いつ襲われてもおかしくない状況だしね」

怖いことを、先輩は言う。

確かに、この空間ではいつ襲われるかもわからない。通路は一本道なので、横から襲撃されることはないが、それでも、一直線に化け物が突っ込んできたなら、後方に逃げるしかない。もし相手のほうが早く走れるのなら、僕らに勝ち目はない。

怖くなりつつ、歩いていると。

「槻君、止まって」

「え、どうしたんですか」

「静かに。誰かの足音がする」

口をふさぎ、僕も耳を澄ました。

確かに、足音が聞こえる。

奥からだ。誰かが、こちらに向けて歩いてくる。この場所は本来立ち入り禁止だから、人なんていないはずなのに。

僕は体を強張らせ、前を見続けた。

やがて、何者かの足が見える。

僕は、ライトを少しずつ上げた。

徐々に、姿が見えてくる。

細い足、スカート、学校の制服と見え、やがて小柄な女の子の全身が見えた。

「あれ、啓介君の友達さんじゃないですか」

可愛らしい口調で、その人物、咲間貴美は話しかけてきた。

「どうしたんですか、こんなところで会うなんて偶然ですね」

偶然ではない、とは言えない。

咲間貴美は、ボロボロになった制服姿で、こちらにむけて歩き出した。肩口で切り落としたみたいに、右肩だけノースリーブと同等になった制服とワイシャツはおそらく、突然変異の名残だろう。

「そっちの方は、藤原玲璃さんですね。お二人とも、どうしてこんなところにいるんですか？」

「それはこっちの質問よ、咲間貴美さん」

藤原先輩が、僕の前に出た。

「尾田君の依頼を受けてきた、といえば、何故私たちがここにいいのか、わかるかしら」

「……ああ、そういうことですか」

咲間貴美は残念そうに呟いた。

肩まで晒した右腕を動かし、頭を押さえる。

「啓介君、ばらしちゃったんですね。絶対に内緒だって言ったのに。でも、仕方がないですよ。人が化け物になるなんて秘密、誰も黙

つては、いられませんから」

咲間貴美は、こちらを見た。

目には力が籠もっていた。血走っているとも、怒りを込めているとも言える。

「だから、私も啓介君との約束を破ります。秘密がばれても人を襲ったりしないってやつを今、破っちゃいます」

咲間貴美は右手を前に突き出した。

なんだ。僕が注意深く見ていると。

唐突に、腕の筋肉が盛り上がった。

ぼこぼここと、まるで泡立つように膨らんでいく。腕の体積が増える度、間接が外れるような音が響いた。

咲間貴美は、表情を強張らせながら、変異する右腕を見ていた。まるで、自分の中の化け物と対面し、それを受け入れるように。

五本の指が三本になり、大きさが腕のように太くなる。巨大な爪が生え、表面は重厚な黄色い皮膚で覆われた。

まさに龍の腕。

「あーあ、ようやく終わりましたか」

突然変異を終えた咲間貴美は、まるで愚痴るように告げ始めた。声色は先ほどまでの可愛さはなく、重く冷たいもの。

「これ、嫌なんですよね。痛いし苦しいし。でも、もう慣れっこですよ。まあ、人に見せるのは三度目ですけどね」

「一度目は両親、二度目は尾田君、三度目は私たちってところかしら」

「ご名答。誰一人、私をまともに扱ってはくれませんでしたかね。

同じく化け物になれるお父さんは割と普通でしたけど、尾田君は完全に発狂してましたし」

突然、咲間貴美は悲しそうな顔になる。自分の変わりきった手を見ながら、普通の女の子が悲しむのと、変わらない動作で。

「本当に、辛かったですよ。尾田君、私を受け入れてくれるって言ったのに。だから試したのに。でも、化け物って……化け物って

言っただんですよ、彼。私のこと、本気で好きだって、言ったくせに」
目頭に滴をためながら、咲間貴美は悲しそうに、苦しそうに告げる。

「だから、私は決めたんですよ。化け物として生きるって」

普通の左腕で目元をこすり、涙を拭き取った咲間貴美は、変異した右腕を、再び前に突き出した。

「私が化け物として生きるために、あなたたちは邪魔です。だから、消えてください!!」

手が伸ばされた。

文字通り、手が伸びたのだ。

手首と思われる部分から先が、ぼこぼこと体積を増やししながら、伸ばされた。

一直線にこちらへ向かってくる。爪や手の大きさを考えれば、直撃すれば無事では済まないだろう。

僕のの前には先輩がいる。

その事実を把握した瞬間、僕は先輩を押しつけて前に出ていた。

迫り来る巨大な腕。

思わず目を瞑る。

やがて、衝撃。

前からではなく、後方から。

前のめりに倒れ、思わず後を向くと、僕のことを押し倒した先輩の姿が見えた。

藤原先輩の両目は、赤く染まっていた。

怪物の目みたいに。

「さつき、いくわよ」

さつき、というのは、藤原先輩に憑いている何かの名前だったか。思い出し、僕は先輩の背後を見る。

うつすらしか映っていなかった姿が、徐々に、鮮明に、僕の視界に入ってきた。

それは、鬼のような何か。

全身を赤い皮膚が覆い、頭にはまっすぐ伸びた二本の角と、金色の鬘。

顔は爬虫類のようで、全身は巨大な人間のよう。下半身は、霊体のようにぼやけている。

目は、先輩と全く同じ、赤い眼。

鬼、としか形容できないそれは、瞬時に先輩の前へと出た。

「さつき、化け物の腕を止めなさい」

先輩は、命令するように言った。

実体化したさつきは、一直線に移動を始める。通路を高速で進んでいき、やがて、咲間貴美の腕と激突した。

爆音、振動、衝撃。

思わずはじき飛ばされそうになるのを、湿った地面に伏せながら、なんとか耐えた。

視線を上げ、前方を確認する。

咲間貴美とさつきは、拮抗していた。

「先輩、あれはなんなんですか」

その隙を突き、僕は先輩に尋ねる。

「あれはね、さつき、漢字で書いて殺しに鬼で【殺鬼】。つまりは、鬼よ」

「鬼？」

「そう。歴史上のどこに出てきた鬼かはわからないけど、こういう因果か、私に取り憑いた鬼。普段は霊体で身を隠しているけど、こういう時には実体化できるの」

霊体化できる鬼。

そんなものは、聞いたことがない。

しかし、実際に目の前にいる。それに、今は信じる信じないを言っている場合ではない。

僕は半信半疑で、前を見た。

「槻君、目を瞑っていなさい。これから先は、ただの虐殺になるのだから」

言われたが、僕は目を瞑れなかった。

この光景を見逃してはならないと、思ってしまったのだ。

先輩は、僕が目を瞑るのを待たず、指示を出した。

「殺鬼、咲間貴美の右腕を粉碎」

殺鬼が吠えた。

赤黒い腕の筋肉が盛り上がる。

同時に、咲間貴美の腕が弾け散った。

力を込められ、圧力に耐えきれず、破裂するように散り散りになった。

「あ、え」

咲間貴美の口から、そんな声が漏れる。

「あああああああああああああああ！！」

悲鳴。

絶叫。

阿鼻驚嘆。

破碎した腕を元の腕に戻し、激痛に悶え地面を転がり始めた咲間貴美を、先輩は指差す。

「殺鬼、咲間貴美の胴体を切り刻みなさい」

冷酷にも、残忍にも、先輩は処刑命令を下した。指示を出された殺鬼はすぐさま移動し、咲間貴美の前で停止する。

両腕から刃が生え、その得物で、咲間貴美の体を切り刻み始めた。しかし、切ったところから突然変異を起こし、再生する。

何度切られても元通りになり、切られる度に咲間貴美の叫び声が上がった。血肉が溢れるように飛び散り、洞窟内を血液のさび付いた臭いで満たしていく。

その光景を、僕は見ていた。

目を反らすことなど許されていないように。ずっと、見続けた。

吐き気。

喉の奥から、何かがこみ上げてくるような感覚。

じんと、頭が痛くなる。

嘔吐。

固形物と液体をまき散らし、僕は顔を下に向けた。自分の嘔吐物を見ながら、なんとか意識を立て直そうとする。

車酔いをしたみたいに、気分が悪い。

景色が歪む。もう意識を保つのも限界になりつつあった。

このまま気絶してしまおう、と諦め書けたそのとき。

後方から、何かが噴き出す音がした。

気だるい体を動かし、後ろを向くと、先輩の目から血が流れていた。何かで穴を開けられたように、目頭から血液が流れ出ている。

先輩は、苦痛の面持ちになり、両手で目を覆った。それと同時に、咲間貴美のほうから聞こえていた斬撃音が、ぱったりと止む。

見れば、殺鬼は攻撃を止めていた。衣服が裂かれ、ほぼ全裸状態まで刻まれた咲間貴美は、その隙を待っていたと言わんばかりに、洞窟の奥へ、逃走を図った。

僕らは、追うことなんてできなかった。

それから、動けなくなつた藤原先輩と、動けるが動きたくなくなつた僕は、しばらくその場にいた。やがて、ようやく動く気になった僕は、倒れたまま動かない藤原先輩を背負って、来た道を引き返すことにした。

先輩に何が起きたのかはわからないが、僕の手には負えることじゃないのはわかる。藤原先輩の協力者、轟木白といういけない奴に助けを乞おうとして、僕は先輩を担いだまま、街に向けて歩き出した。

〈七〉 藤原玲璃の鬼

「玲璃の目はね、鬼の目なんだよ」

廃ビルまで逃げ帰った僕と藤原先輩は、再び轟木白と出会った。

轟木は面倒くさそうに金庫で簡易ベッドを作り、その上に藤原先輩を寝かせた。目を包帯で保護し、藤原先輩について話し始めた。

「鬼の目？」

僕が聞き返すと、轟木は金庫に座って。

「玲璃の目は鬼、殺鬼との通信用なんだ。玲璃が昔、大きな事故で視力を失ったとき、鬼と契約してその目を譲り受けた。玲璃はその目で見たと鬼に伝え、言葉で鬼に指示を出すことで、鬼を行使できる」

咲間貴美と戦った際、何度も指示を出していたのはそのためか。

「ただ、使う度に、つまり命令を実行させる度に、玲璃の目は酷使される。目自体は特別でも、周囲の金組織までは特別じゃないから、先にそっちが破損を始める。結果、目に負傷を負うこととなり、使いすぎるとまた視力を失うことになる」

不意に、轟木は先輩を見た。

両目を包帯で覆われ、全く動かなくなった先輩を見つつ、轟木は部屋の中を歩いて、いくつかの金庫を開いた。中にある膨大な量の紙束を手に取り、目を通し始める。

「まあ、現状はわかったよ。あの山から入れる洞窟に咲間貴美がいて、戦闘になった、というわけだね。なんでそんな空洞ができていたのかは置いていて、とりあえず、これからの話をしようか」

資料を金庫の上に置いて、部屋の中央にいる僕と距離を詰めてきた轟木は、僕の隣でねている藤原先輩を再び見た。

「玲璃には、悪いことしたかな。あんなヒントで興味引いちゃって、悪かったって思っている。だから、今回の件はぼくが引き受けよう。君らはここに残って、玲璃が回復次第別の場所に移ってもらう。お

そらく、数日中には対象の化け物、咲間貴美を処分できると思うから、それまで安全なところに隠れてもらうよ」

「処分、するんですか」

轟木は悪びれもせず、それでいておどけもせず。

「当然の対処でしょ。人を襲う化け物がいる。襲われた人間がいる。だったら、退治しなければならい。退治すると言ふことは殺すと言ふことだ。そして世間一般はそれを処分という」

殺す。

咲間貴美を殺す。

尾田の恋人を、化け物になってもまだ理性はあつた人間を、殺す。焦りを感じた。尾田の元に咲間貴美を返したい僕は、殺処分なんという最悪な結末だけは、なんとしてでも回避しなければならなかったからだ。

ただ、殺す以外に道がないようにも思える。

彼女は、化け物として生きると決めていた。それはつまり、人間とは違う生き方をするということだ。

人も襲うし。

最悪喰いもするだろう。

そんな怪物を野放しにしておくのは、どう考えても得策ではない。「それじゃあ槻君。ぼくはちょっと出かけてくるよ。周りには一応結界っていう防御壁みたいなのを張っておくから、突破されない限りは大丈夫のはず。君達は、とりあえず待機していてほしい」

僕は無言で返す。

「……あのさ、はつきり言うけど、たとえ咲間貴美を元の居場所に返しても、彼女の命は長くないよ。調べてきたら、彼女は末期の癌なんだそうさ。もう助からない。医者ですら無理。僕達が助けても、彼女の苦しみを増やすだけだよ」

冷徹に言いながら、轟木は歩き出した。

「それじゃあね。玲璃が起きたら、僕から話したことを伝えといて」
言つて、轟木は部屋から出て、階段を下りていった。

金庫しかない殺風景な部屋には、僕と藤原先輩だけ残された。一度視線を藤原先輩に向けて、様子を窺ってから近くの金庫に座る。しばらくの沈黙。

「槻、君」

長く続くかと思われた静寂は、わずか五分で打ち消された。

目覚めた先輩は、前も見えないというのに、探すように手を動かしていた。

「先輩、大丈夫ですか？」

「なんとか。まだ目が痛いけど、話せる程度には大丈夫」

無事だとは言いながらも、先輩の息は荒い。痛みを堪えているのか、疲れたからなのかはわからないが、どちらにしろ体調は良さそうではなかった。

右手で両の目を押さえながら、先輩は起き上がる。

「白はいるの？」

「さつき出て行きました。咲間貴美を捕らえにいくのだとか。ここには結界を張ったから大丈夫らしいです」

あえて、僕は轟木が咲間貴美を殺しに行ったと言わなかった。

藤原先輩は、非常に機嫌が悪そうに舌打ちをする。

「そう、それは不味いわね」

「え？ なにがですか？」

誤魔化そうとすると、先輩は予想外なことを言い始めた。

「私たちが、非常に不味い状態にあるってこと」

「どういうことです？」

「結界って言うのは、清浄の領域と不浄の領域に分けて、清浄なほうへ災厄をいれないようにするんだけど、ここは見ての通り不浄なものじゃない。つまり効力は薄い。それに、咲間貴美はそもそも災厄ではなく、人間でもあり化け物でもあるって部類、つまり未分類にあたる。分類できない以上災厄にはならないから、結果的に結界の意味はない」

つまり、結界なんてものの効果はないということか。

ということ、僕らは安全でもなんでもないということになる。

「つまり、咲間貴美がここに来たら、もう僕たちには防ぐ手段がないと？」

「そう。それに加えて、咲間貴美は異常な嗅覚をもっていると推測できる。槻君は見えていなかっただろうけど、咲間貴美は鼻も変化させてた。犬みたいなのにね。鼻が犬のようになったとしたら、嗅覚だって犬のようになっていてもおかしくはない。私たちの微かな臭いを、正確に言えばあの洞窟でつけられた悪臭を追ってきたら、ここまでたどり着くってわけ」

「それって、危険ってことじゃないですか」

藤原先輩はそうね、と呟いた。

どうやら、僕たちはどうしようもないぐらいに危ない状況にあるらしい。藤原先輩が動けない今、奇襲されたらあっけなく倒され、いや、殺されてしまうだろう。

咲間貴美は殺しまではしない、とは思って、しかし彼女も切羽詰まっている部分がある。もし周りに言いふらされると思って、こちらを殺しに来ないとは言い切れない。

「ただ、この状況にも、いくつかの救いがある」

「なんです、救って」

「一つは、この廃墟の中なら、ある程度騒がしい戦闘をしても大丈夫、だということ。結界も張ってあるしね。おそらく人避けもしてある。だから、思う存分暴れられる」

「それって、つまり戦うってことですか」

「そう、戦うの。そして、もう一つの救い。それはあなたの目よ、僕の目。」

霊視がある目。

それがこの状況で、なんの救いになるというのだろうか。

ただ、見ることでしかないのに。

「あなたの目は、ただの霊視。それはつまり、相手の内部を覗くことができる、ということ」

確かに、僕の霊視は例が見えるだけではない。霊視の本当の力は、もっと別にある。

「はい、霊視を使えば、相手の内面を探れます。でも、探つてどうするんですか？　せいぜい不快感を与えるぐらいしかできませんよ？」

「あなたには、咲間貴美の内部を見てもらう。きつと、どこかに癌の大元があるはずなの。それを削除すれば、そこから広がる突然変異は押さえられる。もちろん、他に転移していて、それからも突然変異を起こせるなら、もう打つ手は、ないのだけど」

僕の霊視で、弱点を探せということか。

確かに、それはできる。だが、僕の霊視は完璧でない。準備に時間もかかるし、相手にも負担をかける。

それでも、成功率が低くても僕はやるう、と思った。

ここで投げ出していけないと、思えたのだ。

その後、僕は金庫を全て端に避け、戦うための場を作った。藤原先輩はずっと壁にもたれかかっていたが、金庫が全て動かされると立ち上がって準備運動を始めた。

指示を出すだけなのに、準備運動が必要なのだろうか。いや、そもそも目を包帯で封じられたまま、指示が出せるのだろうか。

心配していると、藤原先輩は何かを感じ取ったのか、表情を硬くした。

僕も、僅かな振動を感じる。

体を強張らせ辺りを窺う。地響きのような音とともに、何かが破壊される音が、真下から聞こえてきた。

思わず部屋の端に移動した僕は、しばらく様子を見た。真下から聞こえてくる轟音。近づいてくる破碎音に、緊張感が否応なく高められる。

やがて、下から突き上げられるように、床が打ち砕かれた。巨大な穴を穿ち、瓦礫にまみれて、龍の腕を持った咲間貴美が、姿を現

した。

〈八〉 鬼対化け物

龍の腕を人間の腕に戻した咲間貴美は、まだかろうじて崩れていない床に着地した。

「見つけましたよ、先輩方」

変身前の姿は、可愛らしい女の子でしかないのだが、それでも気など抜けるはずもない。

両目の瞳孔は開かれ、年頃の女性とは思えないほど、顔が歪んでいた。こちらを見る眼差しは異常そのもので、もはや超常と言っても過言ではない。

「全く、大変だったんですからね。切られた服の代わりにこの布手に入れたり、隠れて屋根伝いにここまでくるの」

首を鳴らしながら、咲間貴美は愚痴を零す。

ボロ布をまとった彼女が追いかけてきた、ということは、僕達を始末しに来た、といううことだ。当然、生きて返すつもりなんてないのだろう。

「それにしても、どうして二人だけなんですかね。臭いは三人分あるのに。ああ、そっか。一人は怖くてにげちゃったんですね。ま、そうですね、誰だって、殺されるのは怖いんだし」

どうやら、殺す気満々のようだ。

殺意に満ちた眼差しを、僕は屈しそうになりながら見る。

「さて、さつさと終わらせませすよ。もうすぐ人も来るだろうし」

咲間貴美は、歩き出した。

一步、また一步と近づいてくる中、僕は藤原先輩に視線を向けた。頭部に巻き付けた包帯に手をかけ、先輩は話し始める。

「槻君。これからあなたには二重の苦を背負ってもらう。一つはあなたに霊視を使わせると言うこと。もう一つは、もう一人の私を見せるということ。どうか、幻滅しないでちょうだい」

行つて、先輩は一步踏みしめた。

僕は端的に答える。

「はい、もう後悔も何もしません」

先輩は、笑った。

今までにない、普通の女子高生らしい、笑顔だった。

「さ、いくわよ」

先輩が踏み出すと共に、咲間貴美も一歩踏み出した。

すでに、彼女の腕は化け物のそれと化しており、こちらに向けて走り出す準備までしていた。右手を後方に引き、両足に力を込め始めている。

先輩は、封印を解くように、包帯を取った。

露わになった両目は、真っ赤に充血していた。鬼のような、それでいて人間の形をした、紛れもない、鬼と人間の混ざった眼。

「さあ、死になさい！！」

咲間貴美が、地面を蹴った。

こちらに向け、前方向の跳躍。

一度地面を蹴っただけで、それ以上の加速を着けないままこちらに進んできた。

僅かに弧を描きながら進んでくる敵を見ながら、藤原先輩は呟く。

「殺鬼。私に憑きなさい」

相手を倒せ、という命令ではなかった。

霊体のままの殺鬼は、姿を表すより早く、先輩の体に入っていた。ガクン、と体が揺れる。

両手をだらんと下げた先輩は、糸の切れた人形のように、動かなくなっただ。

その間にも、敵は迫りつつある。

「死ね！！」

咲間貴美が、罵倒と同時に右手を振り抜いた。拳は藤原先輩の顔面を捕らえる。はずだったのだが。

それを、先輩は片手で受け止めた。

衝撃が走るが、先輩はよろけすらない。

「え？」

瞬時に疑問顔になった咲間貴美などお構いなしに、藤原先輩は掴んだ相手の右腕を、強引に振り上げた。

咲間貴美の体が浮く。

続けて、地面に叩きつけられる。

「ガア！！」

コンクリートが砕ける音とともに、咲間貴美は声を漏らした。

そのままの勢いで、藤原先輩は化け物の腕を掴んだまま、大きく手を振り上げる。

投げ飛ばした。

龍の腕ごと飛ばされた咲間貴美は、壁に激突した。砂埃が上がり、やがてぐったりとした咲間貴美の姿が見える。

「藤原先輩！」

感極まって、僕は先輩の名前を呼んだ。

しかし帰ってきた答えは。

「なんだよ、久々に体使えると思ったら、こんなクソ女相手か、つまらんな」

先輩とは似てもにつかない口調だった。

「おい、その小僧、なにぼつつとしてやがる。とつと敵の弱点を見つけやがれ」

こいつは誰なのか。

困惑したが、すぐに先輩に取り憑いた殺鬼だ、と答えを出す。

憑依までできるのか、と思いつつ、僕は意識を集中し始めた。

視界の中心に置かれた咲間貴美の体が、徐々に透明になる。そして現れるのは内蔵の数々、そして左胸。心臓の部分から、文字の羅列が溢れるように出ていた。

それ、一字一句漏らさず見る。

文字の羅列は、咲間貴美の心情だった。今政に考えていることが、手に取るようにわかる。これが、霊視の力の一つだ。

「早くしろ小僧！」

叱咤され、再度意識を集中する。

咲間君の意識の中は、悲鳴にまみれていた。

辛い、痛い、悲しい、苦しい、吐きたい、怖い、泣きたい。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

嫌、嫌、嫌、嫌。

負の感情しか無いと思われるほど混沌とした思考の中には、殺害衝動と思われる感情は、ほとんどなかった。仕方ないから殺す、ばれたら困るから殺すといった、間接的に殺害を求める感情はあったが、心底殺しを欲してはいないようだ。

探っていく中、特定の部位を指して【痛い】と考えていることがわかった。

その部位について探るため、さらに集中を強めていると。

不意に、咲間貴美が動いた。

「見るな」

瓦礫を払いのけながら立ち上がった咲間貴美の表情は、絶望に満ちている。

「見るな、見るな！ 見るあああああ！！」

咲間貴美が右手を伸ばす。

前に、直線的に、直進的に、こちらに向けて化け物の腕が跳んできた。

避ける間もなく直撃。

衝撃、激痛、吐血。

体が吹き飛んだところで、意識が途切れた。

うつすらとだけ目を覚ますと、すでに僕の体は地に伏していた。

「が……ぐふ……」

一瞬何が起きたのか判断しかねたが、すぐに思い出した。

慌てて前方を見ると、咲間貴美が両膝を地につけていた。右手は前に伸ばしたまま、硬直している。直前の彼女の台詞を思い出して、心が痛んだ。

おぼろげな意識の中、咲間貴美の表情が歪んでいく光景を見た。奥歯を噛みしめ、こちらに向けて走り出した。

敵が迫ってきているというのに、体は動かなかつた。

[illegible]

絶叫と共に、咲間貴美は僕に向けて拳を振り抜いた。

終わりを予感したが、まだ僕には手があった。

「先輩、
いいや殺鬼！」

「俺の名を呼ぶか。いいだろう、それに応じてやる！」

先輩の周りに重厚な装甲が顕現する。

重厚な音。

「小僧。敵の急所はどこだ！」

「左肺の下です」

「承知した！」

軽い体の咲間貴美は、耐えられずこちらに跳んでくる。

殴り殺される。

そう思うよりも先に、殺鬼は、右手を横に伸ばした。装甲が巨大化し、簡易的な盾を作り出す。

衝突。

盾は壊れない。

「もらったアアアアアアアア！」

両手が放たれ、無防備になった上半身目掛けて、殺鬼は頭から生えた透明な角を伸ばした。

「刺突！！」

伸ばされた角は、的確に咲間貴美の左腹部を捉え、貫いた。

同時に、僕の目には咲間貴美から突然変異した部位がなくなっていくのが見えた。

癌の発生源となっていた部位を貫かれた咲間貴美は、体から力が抜けたのか、角が霊体に戻ると同時に、がくんと地に落ちた。

《エピソード》 後日譚

「さて、君は今日、ここに事情説明のため来てもらったわけだけど」
咲間貴美との一件以来連絡を取っていなかった藤原先輩に呼び出され、例の廃墟に向かった僕を待っていたのは、轟木白というさくくさい男性だった。

事件後、彼の咲間貴美の身柄確保と治療、それに加えて事後処理を全て行ってくれたらしいこの男との対談は、未だに嫌なのだけど、しかし断ることもできないだろう。

「端的に言つと、咲間貴美は助かったよ」

つまらなそうに、轟木は告げ始めた。

「一応知り合いの医者に見せて、体の癌を一通り取って、その上で体の補強をしてもらった。違和感はあるだろうけど、とりあえずは生き残れたみたい。ただ、精神的にはどうしようもないけどね。一生トラウマにはなるだろうし、恥にもなるだろう」

確かに、咲間貴美はあの一件を生涯背負わなければならない。

だから、助けて良かったのか、と考えることが、多々あった。

もし、僕達が彼女を助けていなければ、どんな結末が待っていたのだろうか、などと考える。心を覗いた僕は知っているが、咲間貴美は助かりたい、とは考えていなかった。いや、むしろ終わらせたいと考えていた。当の本人は、最初から助かる気なんてなかったわけだ。

そういった事実を知ってしまうと、僕たちがした一方的な自分勝手手が正しかった、とは言えなくなる。いや、元々何が正しいかなどないのだから、こんな思考自体が不毛なのだけだ。

僕たちの行いは間違いだっただろうか。

よくわからない。

「ま、ぼくらにはもう関係ないけどね。あの尾田って少年も、背負うと決めているんだろう？ だったら部外者のぼくらに口出しする

権利はないね。本音を言えば、たいして興味もないのだけど」

言って、轟木は金庫で作った寝床に横たわった。

「あ、そうそう。玲璃の目は戻ったみたい。元々目自体が特殊だから、周囲を直そうとしたのかな。よかったね槻君、多少は歪んでいるけども、これで元通りだ。ぼくと君は最初から普通だし、玲璃は元に戻る。咲間貴美と尾田啓介の関係もある程度までは戻るしね」
「確かに、尾田は化け物の恋人っていう役目を背負うと決めてますが、本当に元通りになるんでしょうかね。僕は、とてもそうは思えません」

僕の話に興味なさそうに聞いていた轟木は、天井を見る。

「癌つてのは、再発するからね。それと同じで、化け物になるのも、この場合は突然変異とでも言えればいいのかな、また起こるかもしれない。でもね、少なくとも尾田も君も玲璃も咲間貴美もぼくも、今回と同じようにはならないよ。玲璃は今度こんなことがあったら咲間貴美を殺すし、咲間貴美は耐えきれず自害を選ぶだろう。尾田つて子は最後まで庇うかも知れないけど、僕や君はたぶん適度に関わって、それでいて適度に傍観者を貫くはずだ」

「僕とあなたを同列に扱わないでください」

「手厳しいね。まあ、当然と言っちゃ当然か。ところでさ」

もう説明など終えたはずの轟木は、まだ話すことがあると言わんばかりに会話を続けようとしてくる。僕としてはこんな廃墟からはとっとと退散したいのだが。

「なんですか。手短にお願いします」

「玲璃の背後にいる殺鬼についてなんだけど、知りたい？」

思考が確かに揺れた、と僕は感じ取る。

ずっと考えていたことだ。藤原先輩の背後にいるのはなんなのか。実体化できる霊体、いや、鬼だったか。確かに鬼を地霊や祖霊だと考える人もいるが、実際にそうなのか僕はわからない。そもそも鬼の霊なんて、僕はみたことが無いのだ。その上実体も持ち合わせているなんていう話は、空想上の物語でしか聞いたことがない。

知りたい、と思う。

ただ、この男から聞いていいものか、とも思っていた。聞けばそれなりの代償が必要なことぐらい、予測できるからだ。

「知りたいですが、代償が必要なんでしょう？」

「いや、今回ばかりは何も求めないよ。ただ僕の興味本位で教えるだけだし。知識は共有したほうが良いしね。もちろん、直接的に教える訳じゃないけども」

お得意のヒントでも出すのだろう。

思料を巡らせる。聞くだけなら聞いてもいいだろうか。知りたくなければヒントの段階で留めておけばいいのだ。ならば知ってしまった。

「わかりました。教えてください」

「ヒントは三つ」

人差し指、中指、薬指の三本を立てながら、轟木は言う。

「ヒント一つ目は『藤原という名前』、二つ目は『姿を消す鬼』、三つ目は『血縁』。以上の言葉を調べれば、必ず答えは出る。それじゃあ、君も玲璃みたいに帰りなよ。僕、わりとそういう感じで割り切って帰ってもらったほうが、すっきりするんだよね」

にやり、と轟木は笑った。

翌日の放課後。

僕は一人で図書室にいた。周囲にはまだちらほらとだが人影があり、こういった状況下でパソコンを起動させて調べ物をする、というのは躊躇われたが、しかし躊躇してもいられない。

未だに古いOSを使用したパソコンを起動させ、ブラウザを立ち上げる。トップページの検索サイトに『藤原、鬼、姿を消す』キーワードを打ち込み、検索をかけた。

三万件を超える検索結果のうち、一番上に出たページを開く。

藤原千方、という人物について説明が成されていた。

太平記という書物に出てきた人物で、四体の鬼を使役していたらしい。どんな攻撃も跳ね返す硬い金鬼、強風で敵城を吹き飛ばす風鬼、洪水を起こして敵を溺れさせる水鬼と来て、四体目の鬼で目が止まった。

隠行鬼、という鬼。

怨京鬼という別名も持っている。姿を消し、気配を消して敵に奇襲する鬼、だそうだ。

考えれば、藤原先輩の鬼と一致する部分がある。

姿を消せる、ということは元から姿がないか、透明になれるかのどちらかだ。仮にどちらだとしても、普段藤原先輩の殺鬼が姿を消していると考えることができないのではないか。

そして藤原という苗字。

偶然の一致か、必然の結果か、真意はわからないが。

どちらにしろ、たまたまにしては、ことができすぎている気がした。

帰り道の校門前で、藤原先輩と遭遇した。

いや、遭遇したなんて言い方は野生動物みたいで、とても失礼なだけでなくも。

「あら、槻君じゃない。どうしたの、こんなところで」

「先輩こそどうしたんですか。学校はしばらく休むって言ってませんでしたっけ？」

「私は暇つぶし。家にいると退屈でね、槻君との関係についても根掘り葉掘り聞かれるし」

どうも、藤原家の中で僕の立場が危ういことになっているらしい。変な勘違いは先輩のためにも解消して欲しいものだ。

「ところで、あの尾田って子はどうなったの？ 私、聞いていないんだけど」

「ああ、尾田は結局、咲間貴美を受け入れるってことで、一件落着

したらしいです。まあ、もう元の関係と同じ状態に戻ることはないと思いますが」

「そう。なんていうか、悲しい終わりになってしまった、という感じね」

言って、先輩は溜息を吐いた。

「そうだ、槻君。買い物手伝ってくれない？　ちょっと今日は買い込まないといけないから、男手が欲しいの」

「別に良いですよ。こんな貧弱な僕でよければ」

二人して歩き始める。

人とすれ違いながら進む先輩の横顔を、ぼうつと見た。

藤原玲璃、という名前の彼女。

背後に鬼を宿しているというのに、特に気にした様子も見せない彼女。

おそらく藤原千方と関わりを持つ彼女。

歴史上の人物との関係なんてものは、当然のように曖昧だ。そもそも実在していたのかすらわからない藤原千方が、彼女の先祖なんてことは、可能性としてとても低い。

ただ、彼女の背にいる鬼が、藤原千方の四鬼の一体、隠行鬼に近ということには、何かしらの意味があるのだろう。理由の無い憑きものなど、まず有り得ないのだから。

「ところで槻君。今度私の家に来てくれない？　もう私一人では説明できないから、あなたから説明して欲しいのだけど」

「お聞きますが、今どんな状態なんですか」

「一晩一緒にいたっていったら、まあ、ことがあつただろう、となったのよ。家族全員それを信じているみたいで、特におじいちゃん、全力で殴ると言っていたけども」

「絶対に行きたくなくなりました。謹んでお断りします」

会話を挟みながら、僕たちは歩いた。

デパートで買い物をし、何日分かもわからない食料を買って、藤原先輩の家に向かった。

道中、不意に先輩が話し始める。

「それにしても、妙よね」

「何がですか」

「私たちの関係よ。事件が終わったというのにこうしてまだ関わっている。本当なら、今回の事件が終わって一件落着。それで終了のはずだったのに」

「どうも、先輩は僕と関わり続けるのが嫌らしい。」

「もちろん、そんなことは僕が許さないのだが。」

「別に、いいんじゃないですか」

僕は言う。

「せっかく関わったんですし、しばらくは関わりますよ。僕は先輩に、多少ながら興味がありますしね。当分は一緒に行動しようかとも思ってます」

先輩は呆気にとられたのか、しばらく呆けた顔をして、すぐに鉄仮面を崩した。

何がそんなにおかしいのか、先輩は笑いを堪えている。

「何がそんなにおかしいんですか？」

「ついに、先輩は笑ってしまった。」

「だって……今の言葉って、ある意味告白みたいじゃない」

「そういうんじゃないですってば」

「なんだか恥ずかしくなって、何度も否定した。」

話しながら、僕は考える。

どうして関わってしまいたいと思ったのか、つい最近までは関わりがたくないと思っていたのに、これでは心変わりが早すぎるだろう。まあ、別に良いか。僕は端的に結論づける。あんな事件があつて、少しでも藤原先輩に意識を向けられるようになった、と思うことにした。

所詮単なる吊り橋効果による興味かもしれない。ただ、それでも僕たちは関わって、お互いのことを多少だが知り得た。それを発展させたいと思うのは、正しいことだろう。

こうしてお互いに秘密を共有し合う関係がいつまで続くかはわからない。僕はまだ藤原先輩にいつていないことがあるし、先輩もまだすべてを見せたわけではないだろう。この曖昧な関係は、いつ崩壊してもおかしくないのかも知れない。

ただ、それでも。

先輩と僕が関わったことに、瓦解するまで関わることに、変わりはないだろう。

《エピソード》 後日譚（後書き）

改稿版終了となります。

今第二章の案を考えていますので、更新できたら更新したいと思っております。そのときは見てくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6576q/>

鬼姫怪奇譚 《改稿版》

2011年2月14日03時25分発行